

会 議 録

会議の名称	平成30年度第2回富士見市社会教育委員会議
開催日時	平成30年5月24日（木）午後7時～9時
開催場所	教育委員会 会議室
出席者	搦木道代議長、荒川照子委員、板橋三宏委員、京谷恵子委員、 佐々木眞理子委員、古澤立巳委員、吉田徹子委員、吉田廣子 委員 事務局
欠席者	本間雄一副議長、岡野雅一委員
公開・非公開	公開（傍聴人 1人）
会議次第	1 協議事項 ・ハイティーン世代の実態報告 2 報告及び連絡事項
会議資料	定期刊行物
会議録確認	搦木道代委員

会 議 内 容 (要点記録)

1. 開 会

○議長あいさつ

2. 協議事項

- ・ハイティーン世代の実態報告

【議長】 前回の宿題について、委員提出の資料に目を通したが、視点の持ち方として、個人の「個」と施設などの「箱」があるように感じた。ハイティーン世代の分類の仕方の案として、図式を作ってみた。指標を、「意欲の有無」「帰属の有無」と設定してみたので、それぞれの事例がどこに分類されるのか、何となくイメージをしながら、探っていけたらと思う。事例について、各自説明をお願いしたい。

【事務局】 公共施設におけるハイティーン世代をまとめてみた。生涯学習課や貝塚資料館、難波田城資料館は、事業が多いのでそこに参加している傾向がある。交流センターやコミセンは、フリースペースで勉強をしていたり、おしゃべりをしている姿がみられている。公民館は、事業もフリースペースもあり、両方の側面があるが、水谷公民館と水谷東公民館は、ハイティーン世代が中心となり企画している事業があるため、ハイティーンが二十歳を超えて、大人になっている姿も見られている。児童館では、18歳までの方を対象に、夜間開館を行っており、相談をしに来る子もいれば、ふらっと立ち寄る子がいたり、人数は多くないが、姿はみられているとのことだった。

【委員】 勤務先でアルバイトにきているハイティーン世代に話を聞いてみた。親に言われてアルバイトをしている子は誰もおらず、自主的にみんな来ているので、理由は様々だが働く意欲をもっている子がほとんどだった。通学中の子やフリーターの子など様々だが、意欲がある時点で安心できた。一方で、成人に近い年齢で引きこもっていると思われる子を知っているが、自分も親として、もし自分の子が働かず家におり、成人になって国民年金の通知が届いたらどうするだろうと、複雑な心境になる。

【委員】 ボランティアの視点で、聞き取りを行った。ぱれっとのボランティア団体では、中高大学生のみの登録はないが、団体に属しているハイティーンはいるだろうとのことだった。公民館では、小学生の子ども達が企画している事業があり、以前はそこに上福岡高校のボランティアグループがお手伝いに来ていた。今は学校が廃校になったため、なくなっている。子ども教室の事業でも、小学生で参加していた子たちが成長し、ハイティーン世代が夏祭りなど大きいイベントの時に手伝ってくれていたが、就職や転居などをきっかけに終了していた。社会福祉協議会が行っているごみ拾い事業では、中学生が参加してくれているとのことだった。

【委員】 学校の視点で聞き取りを行った。高校生は部活動中心の生活が多いようだが、母校の中学校に指導で来てくれたりする。これは、運動部文化部問わずで、時間があると赴いてくれる高校生がいる。また、地域の行事、まつりや運動会などに参加する高校生は、部活動単位が多いようだった。また、軽音楽やバイクなど、学校にない部活に没頭している高校生もいた。勉強に没頭して

いる子は、学校でしている子や予備校、アルバイトをしながら家で勉強している子など様々。今は、高校のかたちも様々で、通信制に通いながら、絵画やコンピューターなど自分の趣味を行う子もいる。高校卒業の資格がいろいろな形で得られるため、選択肢がとても広がっている一方で、仕組みが煩雑になっている側面もある。高校を中退して、就職を選ぶ子もいるが、中学卒業資格での就職は、とても厳しいのが現状。大学生については、小学校へのボランティア活動が非常に盛んで、抵抗なくかなりの回数きて子どもたちをみているので、学校としても非常に嬉しい。一昔前だと、学生は時間があればアルバイトをしていたように思うが、今はボランティアに積極的に、変わってきていると感じる。

【委員】 水谷東地区で活動している「おむすび少年団」について、ハイティーン世代に聞き取りを行った。小学生の時に参加していた児童が、成長して指導員となっている。ずっと関わりをもっているという点について、人とつながれる居心地のいい場所であり、ボランティア活動を行うことで自分への自信となっているのではないかと感じた。居場所づくりにつながるが、子ども食堂をイメージして始めた会があるが、今どちらかというと高齢者の方が多くきてくださるようになっている。年齢は関係ないので、誰でも気軽に立ち寄れる場所にしたいと思う。今日の新聞に掲載されていたが、ニートの人が社会参加できるための取り組みとして、中小企業がバックアップしている事例があった。職人として一定の技術を教わり、習得した段階でその企業に就職できる支援を行っているというもの。自立できる方向に考えられる取り組みが必要だと感じた。

【委員】 町会や活動を中心に調べてみた。東みずほ台まつりでは、富士見高校の吹奏楽部が参加をしてくれている。吹奏楽部固定というわけではなく、こちらから協力要請をすると、その時にメンバーが揃ったグループや部活が参加をしてくれる。無理のない範囲で非常に協力的なので、感謝している。青少年育成市民会議で毎年行っている宿題教室も、最初は、地域の大人がどこまで子どもたちを教えられるのだろうと不安の中で始めたが、今では多くの大学生が関わってくれており、認知されてきていると感じている。今までは、子育て中の保護者の方はとても忙しいので、いろんなボランティアにも参加できなかったと思うが、子育てを終えた大人が、できるだけ多く参加してくれると嬉しいと考えている。みずほ台小では、今年からハッピーあいさつ運動というのを始めた。朝登校時に、家の近くで子ども達におはようの声掛けを行うというものだが、地域で子どもを見守るという視点で、多くの人に参加してもらえたらと思っている。声掛けに対して、子どもたちが何を感じ取るか、また、大人も元気な子どもたちに会うことで、非常に元気をもらえるので、いい連鎖が生まれるとよいと思っている。そのための呼びかけを町会にしている。

【事務局】 淑徳大学の学生のボランティア活動の資料をいただいた。活動に積極的なのは数字をみても明らかで、多くの学生が様々なイベントに参加している。一方で、種類も豊富であることから、学生も選んで参加している部分はあるようで、イベントによっては、参加者0というのも見受けられる。選択肢が広がっている分、魅力的なものには参加者も多い。

【委員】先日、子フェスで会った中学生が、以前子ども大学に参加していた子だった。高校生になったら、子ども大学にボランティアで参加したいと話していた。今は、淑徳大学の学生がスタッフとして参加してくれているが、高校生スタッフも是非、お願いしたいと思った。また、遺跡調査の発掘現場の事例であるが、高校を中退してしまった子が、夜バイトをして昼間発掘現場に来ている中で、調査員の方から勉強を教わり、夜間高校に入り直し、大学へ進み、現在民間企業に勤めている例がある。一時は高校を諦めたとしても、発掘現場がその子には居場所になり、自信をもって切り開けるきっかけになったと考えられるので、何か支援ができればと感じる。

【委員】中退してしまうと、なかなか同世代とはつきあいにくくなっていくと思うが、その中で、遺跡調査員はどちらかという、年配の方が多いイメージ。受け入れてもらっているという安心感もあったのではないか。

【委員】これまでの話の中で、少しつながってくると思うが、不登校の出現率は、小学生よりも中学生の方が多なのが現状。現在、県内でも中学生は100人に対し2～3人が不登校であるという数字が出ている。高校生の中途退学者は一時非常に多かった。今は落ち着いてきているが、選択肢が増えたことが要因だと思う。中学校の時不登校だった子も、県立高校を受験して受かる時代。競争倍率が、1倍を切っている高校が多い。定時制も同じ。高校に進学して変わる子もいるが、入学したが卒業にたどり着かない子も多い。ある県立の通信制の高校では、入学する子が5000人ほどいるが、卒業できる子は、20%くらいと聞いたことがある。中学校の時に不登校だと、高校に進学してもレポートの出し方、作り方などがわからず、卒業できずに辞めてしまい、「中卒」になってしまう。今、私立の通信制の高校では、サポート校があり、わからない子に対し学習支援を行いながら、単位をとって卒業させるという仕組みをとっている学校がある。また、学校へいかなくとも、インターネットで単位を取って卒業するという例もある。通学しなくとも卒業ができる一方で、今度は勉強以外で学ぶ必要があるコミュニケーション能力などの問題がでてきているのが現状のように感じる。

【委員】以前は、針ヶ谷コミュニティセンターでも、高校生の姿が多くみられた。今でも、記憶しているのは、建物がガラス張りなので、よくそこでダンスの練習などをしていた。また、となりが神社で、すぐに民家ではないため、音も多少は出せるというので、夜に集まっている姿があった。水谷公民館でも、夜になると駐車場でスケボーをやりこめていた。当時は、そういう姿を大人が容認していたように思う。今は、何をすることも禁止事項が多い印象だが、大人の受け入れ態勢で、子どもの姿がみられるように変わるのではないかと感じる。楽器などの音についても、使える施設が限られていたりする。ハイティーン世代を見なくなったと感じたが、集まる場所や活動を、大人が狭めてしまっている側面があるように思った。

【委員】針ヶ谷コミュニティセンターで、子ども食堂のつもりだが、高齢者の方がほとんどの実態ではあるが、最近子どもも数人来てくれるようになってきた。その中に、高校生もいる時があり、準備する、料理するというのを、少しずつ一緒にできたら良いと感じている。大勢でやるというのではなく、まずは一人がきてくれて、次に友達を連れてきてもらってのような感じで、一人

から二人、二人から四人のように少しずつ輪が広がっていくとよいと思っている。

【委員】今の話を聞いて、とても良いと感じた。食生活改善推進員をしているが、若い方たちと一緒にできたら本当に素晴らしいと、いつも感じている。

【議長】出身母体がそれぞれなので、いろんな見方や視点がでてきた。大人や社会の受け入れ方により、ハイティーン世代のその後も大きく変わってくるのだと感じた。最初に出した、帰属の有無、意欲の有無の表のすべての層に対して支援が行えなくても、何か手を差し伸べられるような提案ができると良いと思う。

【委員】青少年の広場を各自治体で作っている事例があるが、非社会的、反社会的な行動に走ってしまう子の悪い部分だけをみるのではなくて、その世代が健全に活動できる場所を作るのが大事ではないかという趣旨だった。ふじみ野駅東口にバスケットコートがあるが、当初は音や使用時間など、地域とのトラブルが非常に多く、時にはパトカーが来ることもあったが、その後ルールを作り、双方が理解することで、かなり落ち着いてきているように感じる。公共施設のフリースペースなども、ハイティーン世代の居場所としては、活用の可能性があると思う。問題があるからすぐに排除という姿勢ではなく、話し合いをもっていくことで、継続されていくのではないか。

【委員】児童館は、夜間利用が可能となっているが、公民館などでも全部屋ではなく、一部分だけでもフリーに使用できる場所があってもいいのではないかと思った。部屋を使用するときは料金を払うことが前提だが、払わずに使用できる部屋があると、ひょっとしたらハイティーン世代は立ち寄るのではないかと思った。卓球台は公共施設にあるが、使用する場合はホールなどを借りないと使えない。児童館は無料でできるというのは、非常に魅力的だと思う。

【委員】今日の委員の方の意見を聞いていて印象的だったのが、ネットで高校を卒業した後の、社会性やコミュニケーション能力の有無について。今、心の病が社会現象になっていて、傾向としてIT関係のパソコンに向かっている職業についている人に多いというのをみた。それを考えると、人と関われる居場所をつくるというのが、とても大事だと感じた。

【委員】以前、教育現場にいて思ったのは、子どもをもった経験のある大人は、中高生についてイメージをもてるが、経験のない大人の方は、「おっかない」や「注意をしたらキレてきそう」とマイナスイメージをもっている方が多かった印象。今は例えば、公共施設などにいるその世代に対して、うるさかったら注意しようと思ってくれるのだろうか。

【委員】今は、あいさつをすると返してくれる、とても素直な子が多い印象。それほど、構えなくても、大丈夫ではないか。

【委員】子どもたちの実情を、きちんと受け止めてくれる状況が生まれればよい。

【議長】子どもたちを受け入れられる環境、好意的にみてる、または批判的にみてる環境など、受け手側の捉え方もあるというのが出てきた。

今回は、実態が出てきたので、支援策や受け手側の視点に立ち、どのような取り組みが考えられるか（他市町の事例など含む）、レポートにして、事務局に提出する。

次回会議日程

平成30年度第2回会議

日程：平成30年7月12日（木）午後7時～

場所：教育委員会 会議室

3. 閉 会